

「日中友好への貢献」

2-B 青山学院大学 浅野綺花

今回の訪中は、中国に対する自身の印象を含め、人生を変える旅になりました。初めに北京、西安、上海の3都市を回るという非常に貴重な経験をさせていただき、7日間安全に過ごすことができたことに、日中友好協会を始め全ての関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

訪中前、日中関係は良好であるとは言えず、情報が限られる故に中国に対してマイナスなイメージを持つ日本人が多くいると感じていました。しかし、中国の経済は日本の3倍、人口は10倍の規模を誇っており、日本よりもはるかに優れています。そのため、日本で得られる情報ではなく実際に現地へ赴き、「本当の中国」を理解したいという思いから今回の訪中に参加させていただきました。

3都市を回り、中国に対する印象は大きく変わりました。一つ目は、中国人の日本に対する考え方です。訪中前は、歴史的な観点から見ても、中国には反日感情を持つ中国人が多く存在すると考えていました。しかし、万里の長城で現地の方々が日本語で話しかけてくださったり、日本のアニメが好きという現地の方々に出会ったりと、日本に対して興味を持ってきている中国人が多くいるということを実感しました。二つ目は、中国の優れた技術力です。西安の開発区を訪ねた際に、最新の技術を駆使してあらゆる製品を効率よく開発する企業を見て、30年前までは途上国だった中国からは想像できないほどの技術力に非常に衝撃を受け、日本が中国の技術から学べることも多くあると感じました。その一方で、街や観光地のトイレの整備が日本とくらべると万全では無いところもあり、まだまだ成長が期待される中国に日本の協力も重要だと感じました。

さらに、現地の学生との交流も私に新たな気づきを与えてくれました。一つ目が、学生の意欲です。現地の学生が熱心に日本語を学んだり、日本文化を理解したりする姿勢に、これからの日中友好に前向きな気持ちを持つことができたと同時に、私自身ももっと中国の歴史や文化を学びたいという刺激を受けました。二つ目は、中国の若者にかかる期待です。日本とは対照的に、国全体で若者への期待が大きいと感じました。現地の学生との交流を通して、私達若者がこれからの日中関係を良好にしていく義務があり、それを実現するための学びや行動が必要であるということに気づかせてくれるとても貴重な機会になりました。

最終日の上海の夜景クルージングでは旅で出会った人々、訪れた場所、体験などの色々な想いと重なり、感動で胸がいっぱいになりました。今回の7日間の旅を通して私自身中国をもっと好きになると同時に、日中良好に貢献したいという気持ちになりました。

その一方で、訪中の際中に蘇州で起きた日本人学校の母子襲撃事件を受けて、改めて日中関係の難しさを痛感しました。日中関係をより良好にしていくためにはお互いがもっと相手国について理解することが必要であると考えます。日本のメディアから得る中国の情報はマイナスな情報が多く、反中を促進するような放送が多いと感じます。しかし、実際は異なることを今回の旅を通して学びました。そのため、メディアだけの情報に左右されず、相手

国をもっと理解すること、そして将来を担っていく若者である私達が隣国中国の学生と積極的に交流し、お互いの国について理解を深めることが重要であると感じます。今回の旅を通じて出会った現地の人々、訪中団の仲間、すべての関係者の方々に感謝の気持ちを持ち続け、これからも「日中友好子子孫孫」に貢献していきたいです。

「訪中を終えて考えたこと」

2-B 東京理科大学 浅野弘大

6月24日から6月30日までの訪中は、私にとって非常に貴重な体験となりました。この7日間で得た経験は、今後の日本と中国との関係をより広い視野で物事を考えるきっかけを作っていただきました。

まず、6月25日に訪れた北京外国語大学では、日本語専攻の大学生たちとの交流がありました。彼らは日本文化に対する理解が深く、日本語を話すのがとても上手で、積極的に日本語を学んでいる姿が印象的でした。異なる文化背景を持つ学生たちと直接交流することで、お互いの国への理解が深まりました。その後、万里の長城を訪れ、歴史の壮大さに圧倒されました。景山公園の観光では、北京の美しい景色と歴史的背景に触れることができました。翌日の6月26日には中国共産党歴史展覧館を見学しました。ここでは中国の近現代史を学ぶことができ、中国がどのようにして現在の地位に至ったのかを理解する良い機会となりました。特に、中国の歴史的な苦難と毛沢東の人生を乗り越えてきた努力には感動を受けました。6月27日には西安外国語大学を訪れ、現地の日本語専攻の大学生に案内してもらいました。学生たちは非常に優しくて、大学内の施設、図書館や教室などについて詳しく教えてくれました。その後、西安のハイテク企業BLTを見学しました。この企業は3D金属プリンターの製造を行っており、最新の3Dプリンター技術を見学することができました。中国が技術革新の分野で急速に進化していることを実感しました。6月28日には大雁塔を見学し、大唐不夜城を遊覧しました。中国の歴史的建造物や文化遺産の素晴らしさに触れることができ、傾いている建物はとても印象的でした。その後、兵馬俑はまさに壮大で、その精緻さには驚かされました。6月29日には西安の城壁を見学し、その後上海に移動しました。夜には浦江遊覧で上海の夜景を楽しみました。上海の現代的な都市景観と活気に満ちた雰囲気は、まさに国際都市と呼ぶにふさわしいものでした。

これらの経験を通じて、私は中国という国の多様性と豊かさを改めて感じました。中国は歴史的な遺産と現代の技術革新が共存しており、その発展のスピードには驚かされ、現地の人々との交流を通じて、文化の違いを超えて相互理解を深めることの重要性を実感しました。

今後、日本は隣国である中国とどのように付き合っていくべきかについても考えさせられました。まず、経済的な協力関係を強化することが重要であると考え、中国は巨大な市場を持ち、日本企業にとっても多くのビジネスチャンスが存在します。また、技術革新の分野での協力も両国にとってかなり有益だと考えます。さらに、文化交流の推進も重要です。相互理解を深めるためには、両国間の留学を積極的に行い、教育や文化イベントを通じた交流を増やすべきだと考えました。特に若い世代が交流することで、未来の両国関係がより良好になることが期待されます。この訪中が私の人生経験に与えた影響はかなり大きく、異なる文化や歴史に触れることで、視野がとても広がり、新たな視点を得ることができました。また、

中国の急速な発展を肌で感じることで、自分自身も常に学び、成長し続けることの重要性を再認識しました。今後も、日中両国の友好と協力関係がさらに発展することを願いつつ、私自身もその一端を担えるよう努力していきたいと思えます。

「1週間の訪中を終えて」

2-B 上智大学 アトキンス和田愛

あっという間に1週間の訪中を終えた。今回は普段の観光とは大きく異なり、様々な大学、学部在籍する92人の学生と一緒にいくという点だ。普段の生活をしていれば会うことのない人々と非日常な生活を送ることが出来た。充実した日程の中、様々な関心を持つ団員と話すことで自分の視点や、学部の友達と異なる視点から観光地を巡ったり、現地の学生との交流をすることができた。

私は、法学部で特に国際法を専攻している。その中で特に戦後処理に興味がある。どのように国民感情が形成されるのか、あるいはどのような過程を経て戦後復興が行われるのかに関心がある。今回の訪中では、中国共産党歴史博物館を訪れた。以前から私は、法学部国際関係法学科に所属していることから、紛争処理やナショナリズム、国民感情に興味があった。この共産党歴史博物館では、日中戦争の歴史に関して展示があった。

日本においては、第二次世界大戦といえば、アメリカなどの連合国との戦争をイメージする人が多いと感じている。また、これに伴い日本は原爆や空襲などの被害を受けた被害国であるという感情が日本では主流である。しかし、実際には日本はアジアをはじめとして様々な国を侵略し、男性は戦場や工場へ、女性は性奴隷へと半強制的に動員した。この歴史観を持っていても、実際の悲劇は日本においてうまく隠されているのではないかと感じた。共産党博物館では、死者数やどのような抗日運動があったかを見たが、日本で語られる歴史とは異なると感じた。

歴史は語る人によって多くその性質が異なると言われるが、その相違によって日中間は必ずしも良い関係を築けていないこともあるのではないかと感じた。訪中期間中に起きた日本人襲撃事件のように、まだまだお互いの感情に負の面が多い。しかし、現地の学生との交流において、多くの学生が日本に興味を持ち、また日本語を専攻として大学だけでなく大学院まで進む人がたくさんいることに驚いた。西安外国語大学で学生代表が「少年強則国強、少年智則国智」という言葉を使ったが、この言葉のように強く、賢くありたいと思った。私のこの感情は“国”のためではないが、若者世代が主体的に学び考えることでより良い関係が築けるのではないかと考えた。

現代はインターネットがいつでもどこでも使える社会になり便利である一方、情報をどのように取得するかが問題であると感じる。特に日本も中国も独自の言語を使っているため、情報が偏りやすいと感じている。しかし、実際に顔を見て話すことで同じような苦しみや喜びを感じることができると感じた。また、若い世代の感情は必ずしも反日/反中という単純なものではないと感じた。今回の訪中団には中国に興味を持つ日本の若者が多いことも感じた。遠い存在のように感じやすい中国だが、今回三か所の地域を回る中で、さまざまな地域でいろんな人々の生活を見ることができた。北京では首都における学生の生活を見ることができた。西安では、露店や物売りがいたりして、日本とは異なる風景であ

るが、みんな必死に生きているということを感じた。上海では見ることができる時間は少なかつたものの、体操をする姿やその際のガイドさんの話から、健康を守ったり、孫を育てるために時間を割いているということを感じ、国は違えど生活様式は似たり寄ったりなのかもしれないと感じた。政府間ではまだまだ隣人として良い関係を築くことは簡単ではないかもしれないが、希望を持って今後も中国と関わりたい。

「自由」

2-B 上智大学 石坂玲菜

今回の訪中、応募のきっかけは友人からの誘いであったが自分の中で中国への印象が変わる良い機会となった。まずは北京。北京外国語大学に伺い、そちらに通う学生と交流した。訪中以前から、「ステレオタイプに人を当てはめない」ことは意識していたものの、学生の方と実際に対面するまでは、早口で捲し立てられたらどうしようなど、失礼ながらステレオタイプの視点をどうしても持っていた。しかしながら、私が会った学生は、物腰柔らかく親切にコミュニケーションを取ってくれた。私の中国語の拙さもあり、ほとんど会話は日本語で行ったが、会話も和やかな雰囲気が進み、国を超えてお互い「一大学生」としての素直なコミュニケーションが取ることができたのではないかと思う。また、北京の街全体に関する印象だが、政治色が強いイメージの街で、実際に伺った共産党博物館の存在など、確かに訪中前から想像していた「中国らしさ」を感じる局面はいくつかあった。しかしながら、今回の方中を通して感じたことでもあるが、意外にも「自由」というのが北京に関しての印象である。街ゆく人々も、街に漂う雰囲気も決して堅苦しいものではなく、中国と結びつけられがちな政治的思想が強いというイメージは薄まった。

次に訪れた西安。一番滞在時間が長かったこの都市における思い出が一番強い。西安外国語大学の生徒に伺い、生徒と交流させていただいたが、何より一番驚いたのは大学の規模である。大学に地下街があり、大学の敷地内が一つの街のようであった。寮で生活する生徒が大半だといひ、四～六人相部屋で生活を共にするという。こういった日本と中国における大学生生活の違いも興味深かった。また、歴史的にも有名な兵馬俑にも訪れた。観光ハイシーズンで想像を絶する混み具合であったが、歴史的な遺跡を肉眼で見ることができ胸が熱くなった。私は恥ずかしながら始皇帝にまつわる遺跡程度の認識であったが、同じグループにいた15名ほどのメンバーの中国への関心の高さ、知識の豊富さにも驚かされた。随行して下さったガイドの方も驚くほど、中国の歴史や中国語に造詣が深いメンバーもあり、メンバーの知識欲に刺激を受ける毎日でもあった。

最後に訪れた上海。滞在時間が一番短かったものの、個人的には一番楽しみにしていた都市であった。何にしても、湿度の高さにまずは驚かされたが、期待通り一番国際色があるというべきか、中国の中でも最も自由度が高い印象であった。そして、私が最も楽しみにしていた上海の夜景は筆舌に尽くしがたいものであった。兩岸に建造物があり、建築された時代背景も兩岸で異なるとのことで、異なる時代の建物を同時に見ている、というなんとも贅沢な経験であった。

この訪中で変化したことといえば、やはり中国への印象である。使えないアプリケーションがあるなどの前情報や訪中団への参加を伝えた周囲の心配などから、自身かなり身構えて中国へ向かった。しかしながら、中国での滞在は一言で言うと「自由」であった。日中友好の身近な第一歩は、やはり私自身持っていたステレオタイプの視点の排除、つまり中国への

誤解を解くことである。実際、家族や友人に訪中団での思い出を話す時は中国の自由度の高さについてまず話している。こういった大学生交流や現地へ日本の大学生派遣は、世間で曖昧に共有している中国へのステレオタイプを払拭し、日中友好への突破口になると強く感じている。

「自分の変化」

2-B 愛知県立大学 上村紗生

訪中前と訪中後で私の気持ちや考えにいくつもの変化があった。さまざまな変化について述べ、隣国隣人として今後どのように中国（人）と付き合っていくべきかをこのレポートでは書いていきたい。

まず訪中団参加前の私の中国関連の経験について紹介すると、大学 1 年から中国語を専攻として学び始め、4 年間中国語や中国について勉強している。中国への留学経験はないが、中国への派遣を過去に 1 度経験している。この派遣では中国の大学生と日本の大学生が交流することがメインの派遣で、前回の派遣では今回の派遣よりも派遣先の地域で大学生同士の交流をするという色が強かった。そのため、中国の友達はできたが、実際に目にする中国は今回の派遣より限定的だった。

今回の派遣で変化したことを気持ち、考え、人生という点に分けて紹介していきたい。

まず最初に気持ちの点で述べたい。訪中前後で自分の自信やあまり知らない人との行動への抵抗感という点での気持ちに変化があった。実は気持ちでいうと、訪中前にほぼ関わることがなかった人たち、しかも 90 人を超える知らない人たちと訪中するという経験したことがない一週間の生活に対して、一週間耐えられる自信はあまりなかったし、少々の恐怖感があった。しかし、訪中が始まる空港の時点でたくさんの人と話すことができたし、話しかけてもらえてすぐにその不安は無くなった。訪中の開始直後から気持ちの変化はあったが、訪中終了後の気持ちの変化はさらに大きくなった。

次に考え方の点について。「郷に入れば、郷に従え」という考え方を大事にしないと、時に貴重な瞬間を逃すような体験をして、この考え方は想像以上に重要なのだと考えが変わった。この体験というのが兵馬俑博物館でのことなのだが、兵馬俑博物館は日本にはない秩序のなさがあった。日本にある「人がはけるまで邪魔にならないところで待つ」という概念がなく、目的のためなら人に突進してきてでも目的を果たそうとする光景を兵馬俑博物館の人混みで何度も見た。人が日本に比べたらかなり多いことには間違いないが、この強引きは日本ではなかなか見られない。この兵馬俑博物館を回っていた最初の方は自分は日本的な考え方で控えめに動いていたが、ガイド付きで歴史的な物を見れる機会だと言うのに控えめに動いて貴重なものが見れないのが悔しくなり、中国人の方々に負けじと目的のためなら多少の図太さを持って行動した。その結果、最初の方押し除けられることが多かったが、最後の方はそんなこともなく歴史的なものを見ることができた。

もう一つ考え方の点で変わったことがあった。訪中団前半、蘇州で中国人による日本人を標的にした事件が起こった。このような事件が起こったことで、中国人の総意ではないにしても、やはりこの事件が起こったように日本人に良い印象を持っていない人も少なくはないだろうと感じた。自分はまごころが溢れた集団に接待をしてもらっているが、訪中団や接待をしてくれている集団に属さない人たちはやはり日本人に良い印象がない可能性がある

考えたりしていた。しかし、ホテルの朝食時に横に座っていたお婆さんは何を言っているかわからないものの笑顔で話しかけてくれたし、道中で時々中国人に話しかけられたが、どの人も明るく話しかけてくれた。街で偶然出会ったごく少数の人の印象でしかないが、自分たちを接待してくれている中国人だけでなく中国社会に生きる一般的な中国人の日本人に対する印象は自分の想像ほどは悪くないとも感じた。

最後に人生の点での変化について。これは訪中団の団員からの影響と訪中団で見聞きしてきた体験からの影響の二つある。まず訪中団の団員からの影響だが、どの団員もバックグラウンドが濃く、自分もそんな団員に感化され、人生で挑戦したいことが増えた。また、訪中団での体験からの影響だが、訪中の中で異なる点はあるながらも共通点を見つけたこと、たくさんのまごころを受けた経験、どちらも世界に与える影響は小さくないと感じたことから友好関係をより築いていくべきだと考えたし、今回の訪中で受けたまごころを人生の中で日本社会に還元していきたいと考えるようになった。そのためには、草の根運動の規模からのスタートになるだろうが、両国の一般国民の歪んだ認知をお互いにとっていいものにしていくべきだと感じた。そのために自分は目の前の人がどういうバックグラウンドを持った人であろうと、出身コミュニティのイメージに引っ張られないでコミュニケーションをとっていきたいと考えている。

「憧れの中国」

2-B 北九州市立大学 片岡実優

私は大学で外国語学部中国学科に所属している。「中国語」学科ではなく、「中国」学科という名前の通り、語学的な面だけでなく文化、歴史、政治、経済など幅広い方面から中国について学んできた。日本と中国の間にある溝はまだまだ簡単に埋まるものではないと感じる。私自身も自己紹介で中国学科に所属していると言うと、なぜ？とあまり歓迎されない態度を取られてしまうことも多々あった。日頃のニュースの情報などから中国に対してネガティブな印象を抱いてしまう日本人が多いことは仕方ないと思うが、だからこそ私は自分の目で見た中国を自分の言葉で伝えることができるようになりたいと思った。

最初に訪れた都市は中国の首都北京。訪問前のイメージは、政治の中心地で、歴史的文化遺産が多く、都会なイメージだった。バスから見える景色で驚いたのは、道路の広さと緑の多さだ。片側5車線もある車道や、上下に3本交差しているバイパスのような道路を見て、中国の土地面積の大きさを実感した。また、北京首都空港から中心部に入ってもあらゆる所に綺麗に整えられた植物が植えられ、緑が途切れることがなかった点には想像を裏切られた。また、北京外国語大学の学生との交流では、同じ外国語学習者として大きな刺激を受けた。自分と同じ学部4年生が流暢な日本語を話している姿を見て、日本語上手だねと言うと、「もう4年生だから」と返答があった。私や周りの中国語学習者の日本人達は、同じことを言われた時には「まだ全然できないよ」と返すことがほとんどだった。日本人の謙虚であることを美学とする性格を表しているとも思うが、私の目には堂々と「もう4年生だから」と答えてくれた彼女がとてもしっかり見えた。また、現在の中国では大学院に行かないと就職は難しいという現状を教えてもらい、今を生きる中国の若者の厳しさを知った。

二つ目は憧れの都市西安。西安といえばまずは兵馬俑、そして何よりキングダムだった。到着した西安「咸陽」空港という名前だけで心が躍った。西安では大雁塔や兵馬俑、城壁などを見学した。教科書やテレビで見たことのある景色は圧巻だった。また、西安で印象に残っているのは場所による格差だ。鐘楼の周りなど栄えている地域はお店も多く、夜はネオンが煌びやかであったが、兵馬俑の周りなどの郊外に出ると、ひび割れてボロボロになった歩道やポツンポツンとある小さな飲食店があるだけで、全く異なる景色が広がっていた。一つのものだけを見て判断するべきではないという教訓になった。

最後の都市は上海。飛行機の遅延により予定よりも滞在時間が大幅に縮小されてしまったが、そんな暗い気持ちはナイトクルーズで全部吹き飛んだ！と団員みんなが言っていた。上海の街並みは北京や西安とは大きく異なっていた。北京や西安は車道が広く、同じ形の高層マンションがたくさん建っていたが、上海は車道も片側2車線ほどで住宅もそこまで高く

なかった。また、乾燥している北京 西安に比べて上海はジメジメしている点からも日本に似ている都市だと感じた。

また、今回の中国滞在中に、江蘇省蘇州市で日本人母子を襲撃からかばったスクールバス案内係の方が亡くなったというニュースが届いた。蘇州は私も去年訪れた土地であったため、衝撃も大きかった。しかし、日本では「日本人母子を中国人が襲撃した」という事だけに注目してしまいがちで、中国叩きの材料にしてしまう点が問題であるとする。もちろん簡単に見過ごすことはできない事ではあるが、その日本人を守ろうとして命さえも犠牲にした中国人がいる事実を絶対に無視してはいけない。

中国滞在中は、見学や交流だけでなく、92名の学生のために動いてくださる方々の姿も印象的だった。随行員の皆様をはじめ、私たちが最後まで楽しく、少しでも多くの経験ができるよう動いてくださり、感謝してもしきれない。本当にありがとうございました。

「日中友好」と一言と言っても、いろんな角度からできることがあるはずだ。今回訪中団第一陣に参加した大学生 92名がそれぞれ自分に何ができるかを考え、自分の目で見えてきたことを周りに発信し続けることが大切だと考える。今回手にしたご縁を大切に繋いでいくことが第一歩であると思って、日中友好に貢献していきたい。

「近くて遠い国」を訪れて」

2-B 横浜国立大学 勝永恭平

訪中する前、中国の印象は「近くて遠い国」だった。日本の隣国であり、歴史的にも密接に関わってきた中国だが、メディアのネガティブな報道もあり、どこか近寄りがたい雰囲気があった。一方で言語や文化には興味があり、第二外国語で中国語を学んだり、現在も中国事情の授業を受講したりしている。そんな中、担当の先生から訪中団の案内をいただき、千載一遇のチャンスだと思って応募した。メディアという色眼鏡ではなく、この目で等身大の中国の姿を確かめたいという思いからである。思い切った決断だったが、当時の自分は間違っていないと断言できる。

中国とはどんな国なのだろうかとあれこれ想像しながら北京に到着し、現地に着いて最初に感じたのは、スケールの大ききさだった。無限にそびえ立つタワーマンションや4車線の道を埋め尽くす自動車が車窓から飛び込んできた。日本では見ることのできない景色に感動を覚え、中国に来たことを強く実感した。

今回の訪中団で最も心に残ったのは、現地の学生と言葉を交わせたことである。4日目に訪れた西安外国語大学では、ペアの学生と一緒にキャンパスを散策し、日本語で交流した。最後に連絡先を交換し、今もやり取りが続いている。団長の言葉をお借りすると、短い時間ではあったが「出会いで君は変わる」ことを実感した。日本に興味を持ってくれているようなので、近い将来再会できればと思う。

7日間の滞在生活では、中国の文化や生活習慣を体感することに加えて、個人的に中国の自動車事情を楽しみにしていた。世界的な電気自動車シフトの流れを牽引する中国ならではあって、北京では車のおおよそ半数がEVだった。さらに、バスもほとんどがEVだった。これには驚いたが、同時に最近日本でも中国製の電気バスが導入されていることを思い出した。日本では充電インフラの整備や航続距離などの問題から、まだまだガソリン車が大半を占めているのが現状である。その一方で、中国では大気汚染が深刻な問題になっている。必ずしもEVが環境に良いとか、究極のエコカーだとは思わないが、両国の普及率の違いにはどんな背景があるのか、深掘りしたくなった。また、電動バイクの多さも印象的だった。中心部では、車と同じくらいひっきりなしにバイクが走っていた。ただ、日本と違って接近音の搭載が義務化されていないのか、無音で迫ってきて危うく轢かれるところだった。さらに、ヘルメットをかぶっていない人もかなり多く、安全に対する価値観の違いがおもしろかった。ちなみに交流した大学生に聞いたところ、違法とのことだった。

訪中団では様々な中国の方と交流したが、誰もが優しく、私たちの旅をサポートして下さった。日中関係は紆余曲折を経て今に至る訳で、良いときも悪いときもある。両国間には課題が山積していることは承知の上だが、市民同士の交流はいつでも温かいものであってほしい。対日・対中感情といった表面的な感情論に終始せず、相手国をよく理解し、できれば現地を訪ねることができれば、そうした論理に変化が生まれるのではないか。そう感じた訪

中だった。私の心の中では「近くて遠い国」から「隣国」へと意識が変わった旅になった。最後になりますが、大学生訪中団を企画・運営してくださった日中友好協会、中日友好協会をはじめとする全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「巨大中国と広げる友好」

2-B 早稲田大学 勝亦航太

私は訪中以前より中国の食文化や歴史に関心があった。また、実生活での中国人との交流経験から、メディア等で語られる悪しき中国人像と現実が異なっていることを実感していた。中国に対する関心や好印象を比較的高く持っていたといえる。滞在を通じて食文化や歴史、現地の人々の魅力を改めて確認することができた。

今回の訪中団を通じ、最も強く感じたことは中国の巨大さである。これらは何も、有形のサイズのみに留まらない。むしろ、目には見えない日中関係史や中国の人々の器の大きさ等を強く感じたのである。私はこの日中友好の大きな歴史を引き継ぎ、さらに巨大な世界的友好関係の発展に尽力する心積りである。

北京空港に立ち目を引くのはその広さであった。ガイドの方によれば、縁起の良い龍と亀がモチーフとなっている建造物だ。バスの車窓から見える道路は十車線以上あり、中国という土地の大きさを実感した。

ご用意いただいた歓迎会では日中関係史の雄大さを強く認識した。各者が仰られた、日中関係の歴史を先達の人々が脈々と受け継いできたことは忘れられない。私たちは壮大な歴史と過去の尽力の累積の上にいるのだ。過去の人々を思うと感謝が尽きない。

感謝と同時に、私たちは先の時代から受け継いだバトンを後世に繋げさらに発展させるべきであろう。確かに、日中関係が険悪になることもある。二〇二四年現在、日本の対中感情が良いとは言い難い。しかしそのような時だからこそ、悠久の歴史を持つ日中関係史を再確認する必要がある。加えて、本滞在のような民間交流を通じ互いの魅力を知り、尊重し、他者にもその魅力を伝え続けることに価値が生じるはずだ。

ご用意いただいた美食にも中国の方の寛大さと中国国土の巨大さを感じた。余りが出てしまい申し訳なく思ってしまうほどの種類と量の中国料理が私たちのために並べられ、中国側の心の広さを強く感じた。また、各店舗、一皿ごとに、東西南北各地方の異なる特色を持った料理が調和し提供された。中国の広大な土地だからこそなせる業である。もとより中国料理に心をひかれていた身としては、調味料の塩味から香辛料の使い方までの細かな差異すらも興味深かった。本滞在では味わい尽くせなかった、広大な中国に根付く多種多様な料理を再度訪中し研究したい。

各所の歴史的建造物見学からも中国史の壮大さを実感した。景山公園の夕焼けとともに見た故宮では、その面積に驚かされた。万里の長城では遠くに見える都市と、山々に連なる大きな城壁に圧巻された。共産党博物館、兵馬俑、西安城壁等の見学でも、建物のスケール感と歴史の雄大さに心を打たれた。

北京外国語大学、西安外国語大学での交流においても、キャンパス設備や生徒数の規模感に

驚かされた。スーパーや銀行、付近には大学系幼稚園までそろっており、一都市相応の様相であった。両大学の生徒によれば、それでも中国国内での大学規模としては比較的小さいとのことであった。改めて中国の巨大さを実感した。

中国史が雄大であるように日中関係史も長い歴史を持つ。先の人々が綿々と繋げてきた歴史遺産である。私たちは、日中関係悪化が叫ばれる時こそ、この長きにわたる歴史を再確認し感謝すべきだと考える。

真の友好関係とは何も双方がすべてを譲歩しあうだけでは達しえないことも事実である。共産党博物館では、日中戦争が日本側の見解とは異なる形で展示されていた。双方の意見が異なる好例である。そのような場合においても、まず相手の意見を知り、自分の見解を伝え、双方の納得する道を探し出す努力をする必要があるだろう。お互いの意見を持ち寄り、双方が指摘しあい、洗練しあえる関係こそ、真の友好関係といえよう。

私の願いであり、役割は大きな日中関係を更に盛大にすることである。長い歴史をもつこの関係を継承するのは勿論、後世の時代にも伝承することが私の役目である。加えて、日中友好がさらに拡大し、アジアの、全世界の友好関係を実現したい。全世界の友好のために私は精一杯尽力したい。

広大な中国を理解しきるには一週間では全く足りなかった。今後も巨大な中国の理解に努めるつもりだ。私が食文化や歴史に心を惹かれ、中国の方と交流を通じ好印象を持ったように、より多くの双国民が互いの魅力に気づき、友好関係を更に堅固にすることが理想である。魅力を知ったうえで、互いを尊重し、相異なる意見をぶつけ合える真の友好関係を築きたい。日中友好関係を拡大させ世界友好にも貢献する。これらを実現するために今後も邁進していこうと思える訪中であった。

「思いやりで繋がる心」

2-B お茶の水女子大学 立野穂果

今回はこのような素敵な機会をくださり本当にありがとうございました。関わってくださった全ての皆さまに心から感謝申し上げます。今回の訪中のキーワードは「思いやり」であったと感じています。この7日間さまざまな場面でたくさんの方々の思いやりを感じました。現地の方々とはレストランやホテル、お店などで交流することができ、その度に中国語がほとんど話せない私に笑顔で接して下さり、何とかしてコミュニケーションを取ろうと工夫してくださっていたのがとても嬉しかったです。現地の方々との交流を通して中国のことがもっと好きになりました。特に印象深いのは西安外国語大学でのペア活動です。学生の皆さんは私たちのために準備を重ねてくれていて、最高の笑顔と優しさで歓迎してくれました。短い時間での交流でしたがお互いの文化や趣味などの話もたくさんして素晴らしい思い出を作ることができました。別れ際にペアから洋梨のキーホルダー🍏をプレゼントしてもらったときに『私たちに国境「なし」って意味だよ!』という素敵なメッセージをもらい、本当に胸がいっぱいになりました。思いやる心があることで人と人はこんなにも強く繋がれるのだと実感し、深く感動しました。この友情をこれからも大切にしていきたいです。

実際に訪れる前は中国の芸術や歴史に興味があるものの、暗いニュースも多くて少し怖いなという印象もありました。このように互いの国に対してあまり良い印象を持っていない人々がいることも事実です。でもこれはお互いをより深く知ろうとすることで必ず良い方向に向かっていくと訪中を通して学びました。良いところも悪いところもあるのはみんな同じです。大切なのは、違いを受け止めて互いに思いやることだと思います。他人からの情報に左右されるのではなく自分の目で確かめて、心と心で触れ合って、お互いのことを知ろうと努力することが人と人、そして国と国のよりよい関係性の発展に繋がると思いました。私も中国のことをこれからもっと知っていきたいです。

また、事務局の方々をはじめとするスタッフの皆さまや訪中団の皆さんからもたくさんのお思いやりと学びをいただきました。事務局の方々には慣れない中国での生活を優しくサポートしてくださいました。朝から晩まで1週間ずっと私たちの安全を守ってくださったお陰で中国生活を思い切り楽しむことができました。景山公園に行けたのもとても嬉しかったです。7日間本当にありがとうございました。そして、訪中団の皆さんとの出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。思いやりに溢れ、学びへの意欲も高く、かっこよくて素敵な皆さんと一緒に過ごすことができ嬉しかったです。空港での手続きや中国語でのコミュニケーションに戸惑っていたときなどに何度も助けていただき本当にありがとうございました。出身も専攻も異なるメンバーはそれぞれが強みを持っていて、勉強のことや中国に関する知識をはじめ旅行や趣味の話もたくさんできて、非常に刺激を受けました。私も皆さんのようにいろいろな経験をして視野を広げていきたいと思っています。

班員の方が「自分の目が一番のレンズ」と言っていたのですが、本当にその通りだなと感じています。帰国した今でも中国で実際に目にした現地の方々の温かい表情や壮大な歴史遺産、息を呑むくらい美しい夕日や夜景、事務局の方々の優しさ、そして訪中団の皆さんの笑顔が写真よりも鮮明に脳裏をよぎります。ずっと覚えていたい大切な宝物です。今回の訪中団に参加させていただいて本当に幸せです。この経験を胸に、そして今回築いた絆を大切にして、これから日中友好に貢献していけたらいいなと思います。本当にありがとうございました。皆さん大好きです！

「訪中国で得た知見」

2-B 神奈川大学 中川舜

今回私が訪中国へ応募した動機は、実際に中国へ訪れることによって、日本のなかから日本を捉える一国主義的な視点ではなく、東アジアのなかから日本を捉えなおす多文化主義的な視点を涵養したいと考えたからです。そして、実際に中国へ訪れる事によってそうした視点を涵養すると同時に、それ以外にも様々な学びを得る事が出来ました。

従来、日本に於いては歴史的、文化的な経緯から日本を中心として日本や諸外国を論じる一国主義的な考え方が中心でした。しかし、時代と研究蓄積が進むにつれそうした考え方は批判されるようになり、現在では様々な文化の価値を認識し、そこに優劣を求めない文化相対主義に代表されるような多文化主義的な考え方が中心となっています。

私が大学で学んでいる民俗学に於いても、中心文化を据えそれを基礎に国内の同一文化の多様性を論じる一国民俗学と呼ばれる理論が研究の中心でした。しかし 1980、90 年代、中国の改革開放政策などによって実際に中国へ訪れフィールドワークが可能となるなかで、中央文化中心の一国民俗学は批判されるようになり、異国文化と日本文化の相対化を図る比較民俗学が興隆をみせます。そして、国立歴史民俗博物館などでは、そうした比較民俗学の研究成果を活用し総体的な視点から東アジア世界を描き出す展示がなされており、私もその展示をみて東アジア諸国、特に古来より日本に大きな影響を与えてきた中国へ行き東アジアのなかから日本を捉えなおしてみたいと考えるようになりました。

今回の訪中では咸陽の兵馬俑を前にして日本の古墳についての歴史的な議論をはじめ、中国国内の至る所に設置されている監視カメラの利点や日中トイレの比較など生活文化の事象まで、日本にいては出来ない議論を中国の方と行う事が出来ました。そこで議論した事は、私の持っていた中国のイメージとは大分異なっていました。例えば、監視カメラの問題です。私は、様々な情報媒体を通じて中国国内は監視カメラが多い事を知っていたのですが、その存在に非常にマイナスのイメージを抱いていました。然し、今回の訪中で中国の方から、監視カメラの存在によって北京市内の犯罪率が低いとの話を聞いた時、従来の認識を改め、監視カメラ社会の両義性について現地の人間の意識をもとに認識すると同時に、実際に自分の肌で感覚的に現地の社会を感じ、現地の人間と交流する事の重要性を改めて感じました。今回の訪中団が初の海外であった私は、正直な話お得に行ける旅行のように考えており、学びにそこまで比重を置いていませんでした。然し、実際に中国の地で、現地の方や同じ訪中国の仲間と交流するなかで、東アジアのなかの日本という視点に留まらず、様々な考えを涵養する事が出来、多に刺激を受ける事が出来ました。今回の訪中国で得た知見を自分だけのものとするのではなく、友人や家族に伝える事によって私も日中友好の一翼を担えればと思います。

「中国への興味と知識を持ち続ける」

2-B 筑波大学 深谷 和

この 7 日間は私にとって非常に充実した時間でした。大学では国際関係や国際社会について学ぶ私ですが、訪中前は中国のリアルな社会についての知識はありませんでした。しかし自分の目で多くを見て、中国の学生やツアーガイドさんからリアルな話を聞き、多くの学びを得ることができました。以下ではそれぞれの場所についての感想を書き記します。

北京の景山公園

景山公園はその壮大さと歴史の深さに圧倒されました。景山公園から見た紫禁城は予想をはるかに超える大きさでした。経済発展の真只中で開発が進む北京で、あれほど大規模な遺跡を残していることに驚きを感じ、日本との違いを感じました。夕日がきれいで赤い屋根の建物がさらに美しく染め上がり美しかったです。スケジュールの都合上、一度諦めた場所だったこともあり、訪れられた感動はひととき大きかったです。

北京の万里の長城

万里の長城もまた、その迫力と緑の美しさに圧巻でした。意気揚々と上り始めたのはいいものの、見た目以上に登るのは大変でした。一段一段の大きさがばらついていて、階段を登るのに神経を使いました。登る大変さを感じる中で、古代の中国の人々は技術が今よりだいぶ遅れている時代にこれを完成させたことに、また驚きを感じました。

北京の中国共産党歴史展覧館

中国共産党歴史展覧館は、現代中国の成り立ちを深く理解する上でとても勉強になりました。高校の日本史の授業で断片的にしか触れていなかった歴史が一連のストーリーとして語られていて、興味深かったです。その一方で自分が隣国中国の歴史を深く知らないなど痛感したので、自分で中国の歴史を勉強したいと思います。

西安の兵馬俑

兵馬俑博物館は、教科書で見た景色を自分の目で見ることでできた感動がありました。表情の異なる兵士たちの像が同じ方向に直立する姿はとても神秘的でした。その一方で多くの中国人観光客がいて、じっくりと観察することはできませんでした。しかしこの経験も、莫大な人口を擁する中国を象徴しているようで個人的に興味深かったです。

上海のナイトクルーズ

上海のナイトクルーズは、黄浦江から見える夜景が本当に美しかったです。多くの高層ビルが立ち並ぶ光景は東京を思わせるものがありました。絆を深めたメンバーと楽しい最後の

ひと時をすごせて、忘れられない思い出になりました。

以上のようにそれぞれの場所で最高の瞬間を過ごすことができました。今回のプログラムで得た中国についての知識や興味を今後も持ち続けていきたいと思います。そして、外国語大学訪問で得た中国人の友達を始め、今後出会う中国人の方と良好な関係を築いていきたいと思います。また対中国人以外でも、日本にいる家族や友達にも中国のリアルを伝え、中国に興味や親近感を持つきっかけをつくれればと思います。最後に、このプログラムを企画してくださった日中友好協会の皆様に感謝いたします。大学最終学年に一生涯の経験をすることができました。本当にありがとうございました。

「訪中を通して捉えなおした、日本・中国・日中関係の姿」

2-B 神戸大学 藤田八重

私が訪中を通して学んだことは 3 点ある。1 点目は、日中友好のありがたさだ。私は、幸いにも中国出身の友達が複数人いる。特にオーストラリア留学中は、ヨーロッパやアメリカ出身の友人よりも、中国や韓国といったアジア出身の友人の方が価値観が近く付き合いやすいと感じていたことから、私は日中友好を、当たり前で自然なものであると考えていた。今回の訪中団に参加したのも、日本と近しく、また仲の良い友人が所属する中国の文化について理解を深めたいと考えたことが動機である。そのため、最初の歓迎会や北京外国語大学の訪問にて、中国側の来賓の方や学生の歓迎を受けても、そこに特別な重みを感じることはなかった。しかしながら、共産党博物館を見学した際、日本と中国の歴史的な軋轢を肌で感じた。もちろん、歴史上の出来事としては知っていたが、抗日戦争に対する中国側からの見方を初めて感じた。また、添乗してくださった中国人の方が、「広島平和記念資料館に行った際、日本は少々被害者ぶりすぎだと感じた」と話してくださったことも印象的だった。さらには、日常生活においても、英語が通じず、日本から来たことに特に関心も持たれなかったことから、私の中国人の友人たちが、英語か日本語で会話ができ、日本に関心のある、「私と自然と友達になれる人」に限られていることを自覚した。日本にいても国際交流をすることはできるが、日本にいる外国の方は、日本に好印象を持っている、関心がある、少なくとも存在を知っている方に限られると知った。博物館を訪れて歴史を知ったり、市中の中国の方と関わったりしたことで、全ての方が私の友人のように日本に関心があるわけではないと知った。そして、これまでの友人や、今回の訪中で歓迎してくださった方々のありがたさを自覚することができた。また、日中友好が自然的に発生する当たり前のものではないことを知ったこと、それゆえ今回の訪中団の実施を含め、日中友好への取り組みが、先人たちの努力のうえで成り立っていることを理解した。そして、日中友好へ向けた不断の努力を、今後私たち若い世代がしていかなければならない、という使命感を得ることができた。

2 点目は、中国の貧富の差や光の部分と闇の部分を含めたありのままの姿を知ることができた点だ。私は訪中前、中国に対して「中国の成長は目覚ましく、アメリカも日本もいずれ負けるであろう、経済的に脅威的な存在だ」という印象を抱いていた。もちろん西安の高新区や上海の金融地域はそのイメージに合致するような先進的な姿をしていたが、地下街の人々を見ると、華々しい地域とは対照的な現実があることにも気が付いた。メディアの情報には、中国と日本を比較し、国際競争や日本の将来の不安を煽るようなものが多々存在する。しかしながら、それらの情報に左右されず、日本の良い点や悪い点を含めたありのままを見つめ、良い点は誇り、悪い点は改善に動くなど、等身大の日本の姿を掴んで行動することが重要だと考えた。同時に、中国に対しても、誇張された情報ではなく、まずは事実を事実として受け入れることが必要だと感じた。

3 点目は、中国の文化的な豊かさと日本の歴史との深い関わりだ。今回の旅行では、兵馬俑

坑や万里の長城などの歴史遺産を見学する機会が多くあり、中国の悠久の歴史を感じた。また、中国の文化に直接触れることで、日本が、稲作や箸、儒学や漢字など様々な文化的遺産を中国から譲り受けていることに気がついた。2点目と関連して、私はこれまで、国際競争や国際比較を強調する情報に触れることが多かった。しかしながら、今回の訪中で中国固有の文化の美しさに気が付き、また日本が持つ固有の文化の素晴らしさに気が付いた。もちろん今後とも、経済的な指標で国家間を比較することはあるだろうが、日中の両国が、比較できない、固有の美しい文化を有していることは認識しておきたい。

以上が私が訪中で学んだことだ。私は今回の訪中にて、日本、中国そして日中関係の3つの事柄について、認識を改めることができた。社会人になって以降は、特にビジネスの場面において、中国と関わる場面が増えると期待している。今後も中国のありのままの姿をとらえるよう努めていきたい。

「訪中を終えて考えたこと」

2-B 東京大学 松浦成美

私は体調を崩してしまい、最終日の上海を除いてほとんどの全体活動に参加出来ませんでした。しかし、その中でも訪中を通して様々なことに触れ、感じる事が出来ました。私は元々中国のドラマなど文化に興味があり、今回の訪中をとっても楽しみにしていました。しかし、体調を崩していた間はほとんどホテルの中で安静にしていることしか出来ず、私の体調管理が至らなかったためだとはいえどうしようもないもどかしさを感じていました。しかし、中日友好協会の方々や日中友好協会の方々の様々なお気遣いのおかげで力を頂き、今回の訪中の体験がかけがえのないものとなりました。食事では配達を頼んでくださったのですが、中国では配達は外卖というデリバリーが発達していると教えてくださり、思いがけず中国の文化を知る機会となりました。また、協会の関係者の方々だけでなく、偶然の出会いにも新たな気づきを得ることが出来ました。私が隔離されていたホテルの部屋である 1 人の方が清掃を担当してくださったのですが、私が連日体調を崩しているところを見かねて何か必要なものは無いかと聞いて下さり、水を余分に届けて下さいました。その他にも、西安に滞在していた際、訪中団の皆は西安外国語大学で学生と交流していた日に私がいつものように昼食を受け取りにロビーへ降りると、西安外国語大学の学生が 1 人私を歓迎して下さいました。思うように行動できないもどかしさを感じていた中での思いがけない歓迎に非常に感動したのですが、その方は外出出来ない私のために中国のお土産や薬まで届けて下さいました。今回の訪中において中国の学生との交流は厳しいだろうと諦めていた分、その方とお互いについて語り耳を傾ける交流は非常に心に残っており、日本に留学予定のある彼との再会を待ち侘びています。

日本での中国の方々に対する印象は必ずしも良いものばかりではないと思います。実際に私の周りにも訪中にあまり良い思いを抱いていない人や、中国の方々に少々苦手意識を持つ方がいます。しかし私が訪中を通して考えたこととしては、確かに中国の方々は日本人とは異なる対人関係への感覚を持っていると思います。その分不快に感じることもあるかもしれませんが、日本よりも人同士の壁が薄く、ホスピタリティを大切にする文化なのだろうと思いました。今回の訪中では様々な方にご迷惑をお掛けし、訪中の意味を見失いかけたこともありましたが、関わって下さった皆様のおかげで様々な気づきを得、心動かされる体験をさせていただきました。ひたすらに皆様に支えられ、感謝の思いを抱いた訪中でした。

「訪中での経験」

2-B 愛知大学 溝手塔真

大学で中国語を学び、中国の文化や歴史、政治についても勉強していましたが、コロナの影響で実際に中国に触れる機会がほとんどありませんでした。そんな中、訪日団に参加した中国の友人との会話の中で訪中団の存在を知り、参加することにしました。「自分の目で見て、肌で生の中国を感じたい。」その思いを胸に訪中しました。

訪中の中で訪れた、万里の長城や兵馬俑、外灘といった中国の名所は私の胸に強く刻まれました。万里の長城では仲間とともに実際に険しい石の階段を登り、大粒の汗を流しました。実際に登りながら、当時の人々の努力と知恵を感じました。中国の壮大な歴史と自然を感じることができました。兵馬俑では、兵士や馬の莫大な数に圧倒されるとともに、秦の始皇帝の権力の象徴を感じました。外灘では、船の上から西洋的建築とライトアップされた高層ビル群の美しさを一望することができました。現代とともに歴史が共存した素晴らしい眺めに思わず息をのみました。

また、北京外国語大学や西安外国語大学の学生との交流は私にとってとても刺激的な経験になりました。当初は言語の違いからコミュニケーションに苦労するのではないかと考えていましたが、現地の学生はとても流暢な日本語を話しており、難なくコミュニケーションをとることができました。彼らはアニメや音楽など日本の文化にも非常に興味を持っており、彼らの学びの意欲の高さから多くの刺激を受けました。自分自身の学習意欲も向上しました。

また、ディスカッションを通して、自らの出身地などを紹介し合いました。お互いの国についてより興味関心を持つ良いきっかけになったと思います。このような同年代の学生の生の声を聴くことができたのはとても貴重な経験でした。西安外国語大学でのキャンパス見学では、私の通う大学との規模感の違いに驚かされました。学生たちが大学の寮で生活しているため、多くの店が立ち並び、大学が一つの街のように感じました。同じ大学生でも、日本と中国では異なる点が多いことを再確認しました。今回の交流を通して、私たちが今後の日中友好の担い手になるのだと改めて実感しました。彼らの姿勢から今後も日本語にさらなる磨きをかけ、日本についての理解を深めていくことでしょう。私も負けないよう、中国語や中国についての理解を深め、さらに多くの交流をしていきたいと思いました。

今回、一週間という期間で中国の三都市を周りましたが、まだまだ見られなかった部分もたくさんあると感じています。今回の訪中で中国に対する興味が一層増しました。今後も中国との関わりが途絶えることはないと思います。だからこそ、様々な視点から本当の中国について理解していきたいと感じました。日中交流、日日交流といった交流の素晴らしさについても知ることができました。この有意義な経験をさせてくださった日中友好協会はじめ、サポートしてくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。

「隣国隣人としての思い」

2-B 明治学院大学 八木美桜

中国への訪問は非常に興味深い経験でした。都市の活気、歴史的な建造物、そして現代と伝統が交差する文化に触れることができ、実際に中国へ行かなければ得ることのできない多くのことを訪中団を通して学ぶことができました。まず、中国の歴史的な遺産にはとても驚かされました。今まで、北京にある万里の長城や西安の兵馬俑博物館などを歴史の教科書でしか見たことがなかったので、今回の訪中団で実際に自分の目でそれらを見たことで古代中国の偉大な文明を感じるようになりました。特に、中国の象徴的な観光地でもある万里の長城の壮大な景観に圧倒されました。万里の長城は歴史的な価値と壮大な建築技術を兼ね備えており、その範囲の広さと迫力に感動しました。長城を歩くことで、中国の歴史や文化に実際に触れることができ嬉しく思います。過去にこの壁がどのようにして築かれ、どのような意義を持っていたのかを考えると、当時の人々の労力と知恵に敬意を感じました。登る階段や石の間には、長い年月の経過を感じさせる歴史の息吹があり、その存在感に胸が熱くなりました。実際に7号目まで登り、そこから眺める景色は壮観であり、中国の自然の美しさと広大さを改めて実感しました。また、中国の現代の発展にも感動しました。上海では高層ビルが立ち並んでおり、それらの高層ビルを眺めることで、都市の成長と変化を肌で感じることができました。日本とは異なるその景色にグローバル都市としての上海の姿を垣間見ることができました。特に、上海中心部の超高層ビルや上海タワーなどは、その存在感が際立っており、都市の象徴としての役割を果たしているように感じられました。夜になりライトアップされたビル群は幻想的であり、まるで夢の中にいるかのような感覚に陥りました。上海の高層ビルはただ高いだけでなく、その建築技術やデザインにも興味深さを感じました。先端技術と美意識が融合したビル群は、私たちの常識を超えるものであり、都市の未来を感じさせてくれ、都市の魅力と可能性について考える機会を得ることができました。そして、この訪中団の中で最も印象に残っていることは北京外国語大学と西安外国語大学に訪問したことです。どちらのキャンパスも広大で美しいものであり、学生たちの熱気溢れる姿に触れることができ、異なる文化や言語に触れる貴重な機会を得ることができました。コミュニケーションにおいて、言語の壁や文化の違いがある中でより円滑なコミュニケーションを図るために、自己のスキルや知識をさらに向上させる必要性を感じましたが、お互いが持っている言語能力を最大限に活かして交流をし、現地大学生たちとのディスカッションを通じて、新たな視点や考え方を学ぶことができました。西安外国語大学では中国の伝統的な舞踏や音楽、書道などを披露して頂き、その美しさと繊細さにとても感動しました。現地の方々との交流を通じて中国の人々の温かさやおもてなしの心を肌で感じることができました。これは実際に自分自身の足で中国へ行かなければ絶対に得ることのできない感情であり、もっと多くの人々に中国の素晴らしさを知ってもらいたいと強く思いました。今後もこの訪中団での経験を活かし、国際交流や異文化理解に積極的に取り組み、国際的な視野

を持ちながらグローバルなビジネスや交流をしていきたいと考えています。